

## 歌の歳時記

## — 日常の不思議・おかしみを詠む

小池 光×花山 多佳子

## 当たり前で不思議な歌

花山 今日のテーマは「日常の不思議・おかしみを詠む」です。どういう話になるでしょう、小池さん。

小池 「日常の不思議・おかしみを詠む」って、これがすなわち短歌だという感じがするね。「日常」ってよく言うけれども、よく考えたらどこからどこまでが日常で、どこからど

こまでが日常でないのか判然としません。海外旅行に行けば、それは日常ではないと普通は思うけれど、隣で寝ている人の鼾いびきが気になったりすることがあるわけで、日常の延長なんですよね。だから「日常の不思議・おかしみ」というのは、人間が生きているところなものなんだなという感じもするから、あんまり「日常」という言葉に流されなくてもいいんじゃないかと思うな。

花山 人が生まれること、亡くなることもひとつの日常なわけだから。

小池 スタンダードだけれど斎藤茂吉の歌です。茂吉は昭和二十八年に七十一歳で亡くなっています。最後の歌集が『つきかげ』で、おかしい歌がいっぱいあるんですよ。

人間は予感なしに病むことあり癒れば  
楽しなほらねばこまる 斎藤茂吉

これ、笑うでしょう？ 何が楽しいのかよく考えてみると、なかなか奥が深い話じゃないかと思うけど、どうですか。

花山 「人間は予感なしに病むことあり」という命題がまず、奥が深いですね。

小池 ぴんぴんしてどこも悪くないのに、ある日突然病気になることがある、というのですね。この「予感なしに病むことあり」というフレーズがなかなか面白い。なんと言つても不思議なのは「癒れば楽しなほらねばこまる」の特に「なほらねばこまる」です。

花山 ひどく当たり前にして切実つて感じます。

小池 たしかに病気は治らないと困りますよね。まさにその通りなのですが、こういうふうに正直にはなかなか言えない。短歌つてもっと立派なものだという気持ちがあるから、立派なフレーズを考えるんだけど、この人を食ったような、とほけたような、「なほらねばこまる」で歌が終わるといのは茂吉ならではのです。

花山 一般的には、作る上での参考にはなりたいですよね(笑)。でも、こういう短歌もあると思えば、相当、<sup>な</sup>籠が外れるんじゃないでしょうか。

小池 正直に、どこにでも転がっている言葉

で。でもなかなかできないんですよ、それが。

花山 『つきかけ』には、こういう歌がいっぱいあって、上田三四二さんなどは『つきかけ』はなくてもいい歌集だ」と言っただけで、小池光さんはご推奨の歌集ですよ。

小池 斎藤茂吉って人は、老いるのが早くきた人で、六十代の後半になるとトロンとしてくるんです。晩年の二年くらいは、もう寝たきりだからね。そのトロンとしてきた中で、ふわつとした感覚がこういう歌にも反映されていると思うんだ。一種の、老境ならではの間延びした、ゆるんだ言葉の面白さみたいなものかな。

### 短歌史上なかつた高齢者の歌

花山 老境ということでNHK学園の『彩歌』の歌をあげてみます。

「こぼした」と言はれますでもいつしかにこぼれるのです八十四歳

「彩歌」二〇一五・冬 野口美美

小池 笑う歌じゃない、悲しい歌だね。

花山 口語がうまく使われています。「〜と言はれますでもこぼれるのです」という口調で、なんだかじーんとくるんです。もし、これが文語で「言われるれど」とかになると、やっぱり気持が伝わってこないでしょう。

小池 普段着の、普通にしゃべっている言葉の延長で歌を作っているとこがいいよね。最後の「八十四歳」という締めめの方がうまく決まっています。放り投げたように「八十四歳」と言つて、そこで歌の形ができました。次のは最近読んだ、百二歳の方の歌です。

いろいろと子供と話したいけれど何話そうかわからなくなった

『老いて歌おう』 廣江かの

『老いて歌おう』というのは、宮崎県の歌人、伊藤一彦さんが指導していて、高齢者で介護をしている人、介護されている人に短歌を教えて、十何年も本を出しているんです。

最初は宮崎県だけだったのですが、評判を聞いてだんだん広がって、全九州になって、や

がて全国から歌が出されて、毎年立派な本になっていきます。性別、年齢と名前が載っているのが、他のアンソロジーと違ってユニークなところですね。まず、目が年齢にいく。年齢って、巨大なインパクトを持っています。この歌、ユーモラスなんですけれど、よくよく読むと、人間の生きていく果てにある真実の姿みたいなものがあって、はっとしましたね。

花山 老人と子供とは、単純に考えるとうまくいきそうな感じがするけれど、そうでもないですね。

小池 作ろうと思って作れる歌ではないね。



花山 この作者も九十七歳です。

よく見ればわが十指みな指紋なくすり指のみ渦でありしに

「彩歌」二〇一四・冬 井戸川篤子

小池 人間って、だんだん指紋が消えて、つるつるになっていくんだね。

花山 年を取るほど、自分の身体にふと気がつくんですね。どこかが痛むからつくづく眺めてみたり、足が曲がっていることに気づいたり、日常というものが身体に密着してくる感じがしますね。「くすり指のみ渦でありし



が」というのが、なかなかいいと思います。小池 ここで歌になっている。指紋の形って渦型とか何種類かあるでしょう？ この人はくすり指だけが渦巻き状の指紋だったんだけれど、それさえもなくなってしまった。こういう歌はこれまでなかったよね。昔は、この年齢まで生きて歌を作るなんて人がそうはいなかったからね。

### ユニークな対象の把握

花山 茂吉に戻って、二首目の歌を。

小池 これは昭和二十三年から二十四年の東京の風景です。まだ荷馬車があったころだね。

税務署に届けに行かむ道すがら馬に逢  
ひたりああ馬のかほ 齋藤茂吉

「ああ馬のかほ」の結句がすごい。税務署に確定申告かなにかに行く時ですよ。税金を払うのが嬉しい人はいないから、税務署に行くのは面白くないわけでしょう。「こんちく

しよう」と思っただけ行く時に、道端に荷馬車が止まっていた、その馬と目が合った。そうすると馬にはかにされたような気がした、と。

花山 そう言っているのかしら？。そうではなくて、これは、自分がこんなに悩んでいるのに、馬というのはたいしたもんだ、ただただ馬の顔なんだと。自分を超えているというか。

小池 なるほど、そういう読みですか。

花山 何も言っていないのがいいですよ。

馬の顔がどうのこうのって言わないで、ただ「馬のかほ」と。

小池 しかしこれは、考えてみれば力技で、我々は「ああ馬のかほ」で歌は作れないですよ。絶対に浮かばないし、「ああ」っていうのが出てこない。

花山 たいていは「ああ」っていうと自分の気持ちの表現ですが、馬の顔に対する驚きというか……。

小池 驚きというか、不快感ね。

花山 不快感？ そうかしら（笑）。

小池 これは、やっぱりそうですよ。馬が俺をあざ笑っているように見えるんだ。

花山 私はそういうふうには全然読んでいな

かった。うーん、そうかなあ……。

小池 茂吉っていう人の不思議なのはそういうところだね。馬とでもまともにけんかするようなどころがあるんですよ。

花山 蚤なんかとはよく、ね。

小池 そう、蚤、虱なんかともよくけんかする。人間と人間でない動物との区別があんまりない。まあ、難しく議論するより、こういうものは読んで笑えばいいんだね。

花山 「馬のかほ」の存在感、自分がうわつて出るんじゃないかと、最終的に馬の顔が出てくるところがいいなと思います。

小池 ちよつと似てるかなというのが、小島ゆかりさんの歌です。

悩みある顔の近くに猫が来て圧倒的な

ひげのかがやき

小島ゆかり

小島さんの最近の歌集『泥と青葉』の歌です。親を介護するすごく辛い歌が並んでいるんだけど、その中にぼつとこの歌があるのね。私も猫を飼っていたから覚えがあるけど、多分これは小島さんがソファーなどで横になっっている時だろうね。

花山 そんなこと、書いてある？

小池 書いてないですけど、ソファーに寝ると、猫が体の上に乗ってくるんですよ。猫と自分との距離のことはどこにも書いてないけれど、読めばものすごく近いことはわかる。そこにちよつとユニークなこの歌の意味があるかな。

花山 「悩みある」っていう出だしで自分の悩みを何も語ってなくて、最後に「ひげのかがやき」で収めているのがいいと思うんです。一首全部に自分の思いを述べるのではなく、猫が出てきたり、馬の顔が出てきたり、自分以外の迫力あるものが出てくるのが面白いと思います。

小池 そうそう。「圧倒的な」って、ここで歌になったっていう感じがする。

花山 それでは、圧倒的な迫力という点で、伊香保大会の作品です。

うどん屋の湯気立つむこう女童が顔より大きなかき揚げを食む

伊香保短歌大会 水野直美

これは、小島さんが題詠のトップに採った

歌です。

小池 なかなかの傑作ですよ。うどんや蕎麦にのつけるかき揚げが、やたらにでっかいって時々あるよね。小学生、低学年だろうなあ。もうもうと湯気立つ向こうで、そのでっかいかき揚げを食わんとしているという場面の歌だよ。ね。「顔より大きなかき揚げ」というところがすごく面白い。誇張と言えば誇張なんだけれど、誇張でもいいんだね、とにかくでっかいかき揚げを女の子が今、食わんとしている。生命力、生きる力、気力の溢れた歌で、女の子ももちろん素敵だけど、そのような視点を捉えて詠んだ作者の紛れないまなざしが素敵だと思いますね。

花山 「湯気の向こう」というと、家族の団欒だとか、亡くなった人の顔が見えるとかいう歌がとても多いのね。今回の伊香保大会でもかなりありました。パターン化するということか、しみじみとしたものが流れる、温かい人情のようなものが流れるという歌が多い中で、この歌は私もはっとして佳作で採りました。

小池 かき揚げうどんを食う女の子というのは、そもそも歌の材料としてすごく珍しい

し、しかもそれが顔より大きなかき揚げだ、と。

花山 こういうふと見かけたものを詠むっていうのはいいんじゃないかと思えます。「女童」は「めわらわ」でいいんじゃないっけ？

小池 作者は「めわらべ」とルビを振ったようです。どちらでもいいのかもしれないませんが、普通、短歌では「めわらわ」。「童」という古い言葉に女の子の「女」がついて「めわらわ」と読みますね。

花山 よくできた歌は、読んでいいなと思っても意外と忘れちゃうことも多いですが、かき揚げの歌は一生覚えていくかもって思ってしまう、そういうところがあります。

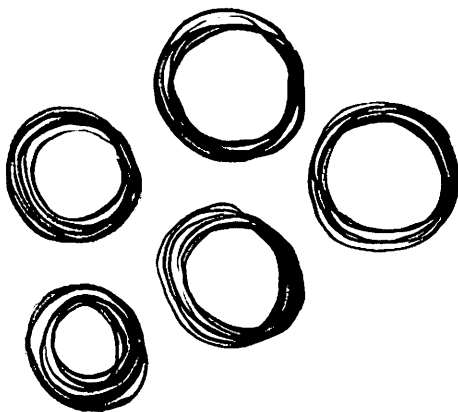
### 日常と非日常のぶつかるところ

小池 次は佐佐木幸綱さんの「ほろほろところ」という最近出た歌集です。

前月のカレンダーあり棺と居る霊安室  
の壁に大きく  
佐佐木幸綱

幸綱のお母さんは、佐佐木由幾さんという歌人でした。幸綱はお母さんを亡くした時の歌をたくさん作っています。病院についた時にはもう亡くなっていたという歌もあります。この歌は病院の霊安室だと思うのですが、その壁になんと、カレンダーがかかっていた。しかもそれは、捲っていない前の月のままだった。これはまさに非日常的な最たるものと、カレンダーという日常そのものがぶつかるというのかな。死んだという時にカレンダーの歌を作るとするのがね。

花山 前月のカレンダー。これはひとつの発



見、というと変だけれど。

小池 目線だね。母が亡くなった時のことを詠うなら、たいてい母だけのことには視点がいつてしまうけど、幸網の視点は壁のカレンダーにも向かっているんだね。

花山 こういう際にまわりを見ていることって、実際は多いでしょう？ だけど、それをあまり歌にしないってことじゃないかな。

小池 そうかもしれないな。どこかでそういうブレイキがかかっちゃうんだろうね。人の死というのも日常のひとつまで、幸網の歌を見ると、母の死であっても日常のひとつまでというか、そうやって我々は生きているんだという感じですか。つまり、日常と非日常は線を引いて分けられるものじゃないという感じを改めて強くしましたね。

花山さんの歌をやりましょう。

大根を探しにゆけば大根は夜の電柱に  
立てかけてあり

花山多佳子

私は、前から花山さんのことをしゃべる時はこの歌を引いています。この歌が非常に有名になったので、花山さんは「大根歌人」と

言われるんです(笑)。

花山 それは褒められていることなのかしら。

小池 褒めているんですよ。スーパーに買い物に行つて、多分、買った物を自転車のかごに入れたんじゃないかと思う。両手に提げていれば落としたのはわかるものね。家に帰って来たら買ったはずの大根がなかったんですよ。途中でそれに気づかなかったの？

花山 食事を作る段になつて、大根がなかったわけ(笑)。

小池 すぐではなくてしばらく時間があつた？

花山 そうそう。

小池 すぐかと思つてた。それでも探しに行くわけなんですわ？

花山 どこに落としたんだろうと思つて、道をずつと辿つたんです。そうしたら、その大根が道端の電信柱に立てかけてあつた。

小池 ここに日常の本当のドラマがあるんだね。落とした大根と、それを拾った人がいる。それはどこの誰かわからない。多分、家庭の主婦だと思うけど、道の真ん中に大根が落ちていたのを見つけて、これは誰かが落と

したに違いないと。その人がじゃあ私が貰っちゃおうなんて、そんなことはしない。必ず取りに来るから、わかる所に置いておこうと思つて、電信柱に立てかけておいてくれた。

花山 電柱の下に、それが白々と立てかけられているのを見た時は驚きましたね。

小池 嬉しさもあつたでしょう(笑)。

花山 嬉しさよりびっくり。でも、これが私の大根だつていう証拠はないんですよ。たしかにそうだと思うんだけど(笑)。

小池 ちなみにその頃、大根一本いくらくらいでしたか？

花山 忘れましたが、値段の問題じゃないと、ない困るわけ。

小池 そういう日常の中のドラマを感じる面白い歌で、特に感心するのは「大根を落とした」ということは省略している。それは学ぶべきところですか。たいていは「大根を落としてしまったので探しに行けば……」という歌を作るんじゃないかな。なかなか省略できないんだよね。全部しゃべろうとするから下が

雑になっちゃう。

花山 この歌い方だとわからないという人が女性に多かったのが不思議でした。男性は

「多分落としたんだろう」と言うんだけど、女性性は「そんな筈はない」「落とすなんてあり得ない」と。でも、自転車ではあり得るんですよ。

小池 自転車の後ろの籠でしよう？

花山 後ろです。でもそういうことがわからないと、「探しにゆけば」という状況がまったくわからないと言われて。これ、歌会で出した歌なんです。

では、次は大根つながりで、しみじみとした良い歌です。

大根を埋けたる位置の定かならず積り  
ゆく雪みつめいるのみ

「彩歌」二〇一四・春 佐々木多摩子

長野だったか、雪国の人だと思えます。大根を探して見つかったという歌ではなくて「大根がどこにあるか、もうわからなくなっちゃった」という歌です。なんかいいと思うんですけど。

小池 上手な歌だね。

花山 自分の気持ちと言うんじゃなくて、「大根を埋けたる位置」というのに絞られて

いるところがとてもいいと思った。

小池 「大根」と「雪」だけの対比で、余計なものが出てこなくて、うまく言いおかせているね。ちょっとおとなしいかな。

花山 おとなしすぎる？

小池 すきる、とは言わないけど、ちょっとおとなしいかな。

花山 でも、こういう歌の良さっていうのは見落とされがちでしょう。

小池 一首の中で「大根」が生きているよね。「埋けたる」は「いけたる」でいいのかな？

花山 いいのでは。「埋けたる」は古語です。「歌を忘れたカナリア」の歌詞に出てきます、「背戸の小藪に埋けましょか」を急に思い出しました。

### 若い世代の歌人たち

花山 今、年配の人と若い歌人の感覚の世代差がすごくひらいています。小池さんも「若い人の歌がまったくわからない」と言っていますね。そこで、あえて若い人の日常の歌を

出してみました。

春の日のベンチにすわるわがめぐり首  
のちからで鳩は歩くを 内山晶太

小池 内山さんは三十代後半かな。

花山 そう。だけど、この歌を作ったのは三十歳くらいだと思います。

小池 これはよくわかります。よく観察すると首と足が逆になるんだね。首が前に出た時に足が前に出るかっていうとそうじゃなくて、首が後ろにきた時に足が前に出る。

花山 そうなの？

小池 逆だから、鳩の独特の歩き方になるんだね。

花山 首の力で歩いているのかしら。

小池 「首のちからで歩く」というのは、よく観察して言い得ている感じがします。首が後ろにいくはずみで足が前に出ている。なかなかいい歌じゃないかな。

花山 いい歌ですよ。若い人の歌を一概にわからないと思っているとと思うけど、けっこう良い歌があるんですよ。

小池 内山君の歌集などはよく読めます。だ

けど平成生まれの歌人となると、何か大きなものが変わる。それがどうもよく纏めないっという感じですよ。

花山 永井祐さんの「日本の中で楽しく暮らす」という歌集が話題になっていて、「わからない」という意見が多い。その中から、わかりやすくいいんじゃないかと思った歌を紹介しておきます。これも平成生まれでなくもっと上の世代ですね。

君と特にしゃべらず歩くそのあたりの草をむしってわたしたくなる

永井 祐

相聞歌かな、こういう愛情の出し方が昔の人と違うなと思うのです。ちょっとかわいいでしょ。どうですか？

小池 まあ、普通だね。

花山 なかなか情感があると思ったんだけど。「薔薇を百本」とかじゃなく、そのあたりの草をむしって、という衝動が素直に出ているじゃないですか(笑)。

小池 要するにガールフレンドとデートしている場面なのね。

花山 わからないけど、そういう感じかな。

小池 「君」っていうのは異性、女性でしょう。友達ではないよね。デートしていて伊香保にでも来た(笑)。しゃべることもないんだけれど、草をむしって渡したくなった。

花山 草食系男子の歌ですね。

小池 「草をむしってわたし」というのがユニークと言えばユニークで、昔からのパターンなら咲いている花をとって渡したくなるんだろうね。しかも「むしる」としたところが、コミュニケーションがうまくできない苛立ちみたいなものを、ちょっと掠めているのかな。

花山 そうそう。「あげたい」というよりは、自分がそれをむしって渡したいという、ちょっとした衝動ですね。

小池 それはわかる。

花山 では、小池光さんの歌。

猫じやらしにつよく反応せし頃の君を  
おもへり十年が過ぎ

小池 光

この「君」は誰でしょう！

小池 これは猫なんだよね。猫を「君」と

詠ったわけですよ。

花山 それが新鮮ですね。

小池 でも、私は猫を飼っていて、去年死んじゃったんだけれど、本当に「君」っていう感じで十数年一緒に暮らしたんです。

花山 メス猫でしょう？

小池 メス猫。小さい時は猫じやらしを摘んできて前で振ると、本当によく反応したんだよね。興奮して飛びかかってきて、それがかわいらしかった。でも十年も経つと、いくら猫じやらしを振っても全然興味を示さなくなる。あれから十年が過ぎてしまった。なんて悲しい歌なんだろう。

花山 「つよく反応」っていう言葉が面白くて。

小池 そこはちょっと工夫した。「反応」っていうのは、こういう文脈ではあまり出てこない言葉だから。

花山 若いとか幼いってことは、物事に強く反応することなんだなど、人生というか、そういうものを感じました。

小池 そう感じてもらえれば嬉しい。



かっこいい歌も作ろう

花山 上手い歌という意味で、最後に取り上げておきましょう。小池光さんの歌です。

黒蔵くろくらのかたへに花の梅の木あり関東北  
をさすらひゆけば

ちよつとその辺りに散策に出た日のことを詠っているんですけれどね。この「黒蔵」というのがすごくかっこいい言い方だと思っただんです。ただの黒い蔵でしょう？ これ。

小池 そうそう。これは群馬県の歌なんです。私は電車に乗るのが好きで、小山おやまから前橋まで行く両毛線によく乗って考えるんです。ある駅で降りて歩いていたら、普通の家なんだけれど蔵があつて、普通は白いけれど、その蔵は真っ黒に塗られていて、それを「黒蔵」と言ってみたわけ、私だね。その横に梅が咲いていた。それだけのことなんです。

花山 この「黒蔵」、実は焼酎の銘柄にあつ

たのです。私もそれを知らなくて、小池さん  
も知らなかった。とつてもかっこいい言葉な  
のに、ちよつと残念(笑)。

小池 「関東北をさすらひゆけば」って、  
かっこいいでしょう。短歌って、どこかかっ  
こ良くないかためなんです。

花山 さんさんかっこ悪い歌を出しておいて  
(笑)。

小池 やっぱりかっこいい歌もなくてはね。

花山 そうですよね。「北関東」ではだめだ  
し「群馬」でもだめ。「関東北」っていうとこ  
ろで決まっています、しかも「さすらう」とい  
う。

小池 最後に花山さんの歌を。

戻り来て畳に倒れ込むわれに「そのま  
ま」と言ひ、むすめ写生す

お母さんが一日中働いて、疲れきつて家に  
帰ってきて、ばたつと倒れた。普通の娘なら  
「お母さん大丈夫？」とか「元氣出して」と  
か言うところですか。花山さんのお嬢さんは  
美術の専門家ですが、これは美大に行つてい  
た時の歌で、「そのまま」と倒れた母親の

写生をするんだ。行き倒れの人みたいにな  
(笑)。「そのまま」と言ひ、むすめ写生す、  
おかしいね。歌集「木香薔薇」は、おかしみ  
が点々とあつて、特にこの歌はすごく面白い  
と思つた。

やっぱり歌って、一読してすぐに笑いをと  
るとか、すごく大事なことだと思うのです。  
また、すごくかっこいい歌っていうものもあ  
るわけで、いろいろな歌のあり方がある。だ  
から、いろいろやってみればいいんですよ。  
一冊の歌集を読んで、一回も笑わなかった  
いうのはだめです。それは、何かが足りな  
い。どこかに笑って吹き出すようなものが  
入っていないと、どこかに涙がこぼれるよう  
なものが入っていないとだめなんです。文  
学って、そういうものじゃないかな。

花山 茂吉にはそれが全部ある。すごい名歌  
から、ばかばかしい歌まで。日常がさうい  
うものですよ。

小池 そうかもしれない。

花山 日常生活といつても、平均的なもので  
はないので、それぞれの日常を歌に反映しま  
しょう、ということとで終わりますか。